

献 辞

玉井俊紀（タマイ・トシノリ）教授は、平成29（2017）年3月31日をもって名古屋外国語大学を定年退職されることになりました。

玉井教授は、昭和39（1964）年3月に東京教育大学文学部文学科を卒業され、ただちに東北大学大学院文学研究科英文学英語学言語学専攻に進まれました。昭和43（1968）年3月、同博士課程を中途退学され、同年4月より愛知県立大学文学部講師として教鞭をとられるところとなり、その後は、昭和48（1973年）4月、大阪大学教養部助教授、昭和62（1987年）12月、大阪大学言語文化部教授、平成5（1993）年4月、大阪大学言語文化部長（大阪大学評議員）、平成10（1998）年4月、大阪大学大学院言語文化研究科長（大阪大学評議員）など各種の役職を経て、平成12（2000）年10月、名古屋外国語大学現代国際学部教授に就任されました。

就任4年後の2004年、中西学園理事および中西学園評議員となられた玉井教授は、国際経営学部国際経営学科を改組して、現代英語学科と国際ビジネス学科からなる現代国際学部の設置審認可にあたり手腕を発揮され、その後2012年に副学長に就任されると、現代英語学科の改組による国際教養学科の創設（2013年）に際して、尽力されました。このように、文字通り現代国際学部の生みの親であり育ての親である玉井教授は、さまざまな国際交流事業においてもアイデア・マンぶりを発揮し、マンチェスター大学（2007～2016年）、ウィンチェスター大学（2012年）、リメリック大学（2012年～）等との中期留学プログラムを実施するに際しても大いに貢献されました。さらに、国際教養学科を中心として大学・学部がJAL関連企業との連携を開拓するにあたっては支援協力を惜しまず、現在のJAL海外インターンシップ実施への道筋を用意されました。同様に、国際交流部が主体となって推進したディズニーUCRプログラム（2009年）への理解と支援においても、人後に落ちないものがありました。

玉井教授の研究領域は、英語学ではありますが、統語論をはじめ音韻論、形態論、意味論などの諸分野におよんでおり、方法論的にも伝統文法からチョムスキー理論等にまたがる広がりを見せておられました。しかし、専門分野における円熟とともに、さらに広やかにして高邁な教養の世界へと雄飛され、とくに本学就任後は、教養人として悠揚迫らぬ態度を示されておられました。各種の重責要職を歴任されながらも、常に芸術作品の妙味を求めて、ひと月に何回となく全国津々浦々の美術館や博物館に足を延ばしておられました。とりわけ古典芸能には目利きであられると同時に目がなく、なかでも歌舞伎にはご執心とお見受けしました。現在、

現代国際学部の文化教育プログラムとして、オペラおよび歌舞伎鑑賞が実施されておりますが、これはひとえに教養人玉井教授の創案になるものであります。

玉井教授は、世が世ならば、学問ならぬ仏門に入っておられたかもしれない家柄で、実際、然るべく修行をされたと了解しております。そのせいでしょうか、時折、常人ならぬ達観振りを披露されることがありました。常人ではとても言えないような大胆な発言をされるかと思えば、この肝心なところで何故発言されないのだ、と常人ならばつい思ってしまうところで、深遠な沈黙を保たれるのです。しかしそれもこれも、つまらぬ俗世の規矩に縛られて生きるわれわれ愚昧な常人へ向けた、玉井和尚からの慈誨^{じかい}であったに違いないのです。

今般、玉井俊紀教授に対し、本学における通算16年間の長きにわたる大学および学部の管理運営への功績および教育・研究上の業績に基づき、平成29（2017）年4月1日付けにて本学名誉教授の称号が授与されます。ここに僭越ながら現代国際学部を代表して、今後とも玉井教授が健やかにご活躍されますことを衷心よりお祈り申し上げます、拙い献辞とさせていただきます。

平成29（2017）年3月1日

現代国際学部現代英語学科長
高田 康成